



安方忠義傳

安方忠義傳
前編四冊

卷之四

遠 13
1305
4



へ13
1305
4

善 忠義傳前編卷之三十一冊



無古曾關

第十一條

江戸

山東京傳著

了ても大宅の光國ハ。唐衣を伴ひて常陸の國に久り。父の病を治す
 藤六夫婦のこころあくなかりし。終末をさへくかりける。小うなれたる。涙
 の海に老の身のかたれうまじし。物語をびく。悲嘆の涙せこめ。志を
 詞もあがりたれが。中よりてしひく。誠小藤六が諫死ハ。武士も
 の鏡あり。おしむ。むじかみ。びし。彼がこころに忠士を家来と持。あひ
 たり。頼信君の放埒。さくも。うて。死御事や。妹綱手。や。夫
 づれ。見を。たて。狂氣。せ。も。理。了。り。不。便。の。者。れ。身。の。を。や
 みる。く。小。長。生。く。か。る。愁。死。人。より。寧。死。む。が。は。し。あ。る。無。用。の。老。の

善田卷之三十一

才や。よくなの長生やといひつ。涙ふせ入りのけし。光國のそは背後より
すのり。背を撫ぐ介抱も。唐衣志とやふ手をつと今とにむきとむとく。
憂事のかさありと。世ふ立がた我才あれは。捨不便うひられ下さむし
といふも泣声なり。光雅いと衣をせ。目とさうあふくひひたれ。むこ
くくえざれうちふよくもおひらけま。生とつともうつづく。むくむし
こひあり。氣げらひとあひ。我おの音を兩人ふめうたぐりよく。よ
日未光國ふ妻のこを愁居く。ふ此度とうと唐衣が。危急を救未
し度宿世の深さえぬ。あか。かみく月老の紅糸をむむびおさあひ
也。えあん氣ごも似合く。よ。一對の夫婦あり。互ふられ得ん
あふ。忌明の後。婚姻とさうのあは。汝等。いふおりふ。あんとしひる。日
唐衣の顔とおうめ。光國が底とさうり。か縁塵を捨り。ちか。く返答

とせざりし。光國のひけれ。親人のおん免。あ。う。唐衣のあ。一得
ん。あ。い。う。て。背。さ。も。あ。ん。と。い。ふ。あ。ぞ。唐衣も。ふ。つ。う。が。我。才。い。と。ひ
玉のさ。願も。あ。は。仕。合。い。く。り。光雅。と。自。瓜。す。く。大。ふ。つ。さ。び。
中。う。く。愁。ひ。の。色。を。あ。し。權。且。兩。人。の。旅。の。つ。れ。を。あ。し。は。我。が。こ。あ。て
こ。人。ぐ。の。回。向。せ。ん。と。佛。間。あ。入。ま。れ。か。く。く。あ。く。忌。明。ふ。い。と。り
け。し。ハ。吉。日。を。え。ん。び。く。婚。姻。を。さ。の。夫。婦。あ。む。の。ま。く。あ。ん。心。成
り。ち。ひ。く。光雅の老休をい。かり。孝行を。尽。し。け。し。ハ。光雅の老後の
たの。し。み。此。う。あ。い。と。安堵の。あ。ひ。を。は。喜。ぶ。こ。と。限。り。は。し。て。禍。福。吉
凶。を。あ。ご。あ。へ。繩。の。ご。し。し。り。常。言。う。ま。あ。哉。喜。び。さ。の。ま。れ。は。ま。こ
秋。心。を。生。じ。其。冬。の。半。小。い。り。光雅偶風のこ。ち。あ。く。打。卧。る。が。次第
ふ。お。り。病。と。なり。さ。う。こ。す。れ。命。数。あ。や。良。運。百。薬。の。志。し。な。り。今。テ。ハ

けてこそ入る。光雅執近く光國をよむ。ひける。我前年純友征
 伐の刻。豊前基取山の合戦。軍令を背き。主君満仲公の浮勤氣に
 かう。已に言又後悔。何とを生涯のうら一功成た。浮勤氣の浮佐
 せん。の心かけ。や老衰。功とたのむ。死力もま。い。げ。ふ。年
 月。ふ。り。その志。こ。げ。し。死。され。こと。これの。冥途。の。さ。り。あり。
 此後。汝。我。お。か。り。源家。不。對。一。何。ふ。れ。一。功。と。た。我。御。勤。氣。此
 免。を。こ。ひ。と。よ。これ。千。僧。供。養。の。功。徳。より。我。お。か。り。の。違。ふ
 勝。と。り。此。更。な。れ。た。の。む。ひ。り。い。ひ。ま。ほ。錦。の。袋。ふ。入。る。太。刀。を。取
 い。し。り。の。方。折。あ。し。い。し。此。宝。劍。の。い。れ。と。し。く。語。し。ゆ。む。
 今。か。う。い。ふ。を。し。これ。の。違。前。年。の。更。あ。れ。が。満。仲。公。お。か。り。の。違。ふ。
 天下。を。守。る。者。う。た。太。刀。を。持。つ。い。せん。と。て。鉄。丸。お。つ。め。鍛。治。を。召。

太刀をけらる。せ。く。え。み。い。も。い。し。心。ふ。つ。太。刀。なり。た。れ。ふ。あ。く。者。や。も
 様。筑。前。の。國。三。笠。の。郡。土。山。と。り。の。所。不。異。朝。より。く。汝。が。の。細。工
 渡。り。數。年。住。の。彼。召。と。て。い。ふ。あ。ん。と。し。け。目。に。さ。る。か。ら
 彼。者。召。都。不。召。上。せ。太。刀。を。け。ら。る。せ。く。え。み。い。も。い。し。心。ふ。つ。太。刀。なり。た。れ。ふ。あ。く。者。や。も
 け。ら。る。下。り。ま。ふ。と。た。あ。く。と。あり。け。れ。然。る。た。か。の。鍛。治。細。工。の。名。を。矢。人
 こ。と。を。心。憂。お。り。ひ。仙。神。の。力。な。り。と。い。ふ。は。し。と。八。幡。宮。召。祈。り。分。明
 の。夢。想。を。得。し。好。む。び。よ。く。金。を。鑠。し。劍。撰。こ。し。六。十。日。小。最。上。の
 劍。二。ふ。り。作。出。せ。り。長。さ。二。尺。七。寸。彼。漢。の。高。祖。の。一。尺。の。劍。と。し。て
 い。ひ。つ。ぎ。満。仲。公。よ。召。こ。ひ。あ。ひ。二。つ。の。劍。あ。く。有。罪。の。者。と。い。ふ
 是。も。あ。ふ。一。あ。り。の。髭。丸。く。り。く。さ。り。け。さ。ば。髭。切。と。名。づ。け。一。あ。り。の。髭
 と。く。り。へ。さ。り。け。れ。ば。膝。丸。と。名。づ。け。其。時。か。の。鍛。治。劍。丸

る海にえん鳥。陰の太刀と名づく。別小一あり打とれんとさつらふの剣
なり。こればかりの鬘切膝丸もおとらふとぞとく。陰の太刀もこればかり。
玉兎剣一名胡の太刀と称す。彼二ありともみ秘蔵しあひし。の
我軍功に賞しむ。伊自筆の感状に云く。これをとらふなりぬ。
さるゆゑ小法師の節も。此太刀不於く何の御沙汰もあらず。今
不於く持侍ふ。誠是我家の面目とぞ。此室のすれは。今あらためて
女小僧よりあつたり。大切よあらうひく子孫に侍ふがごとく。いと苦
け小息に侍とけ。語りく。太刀と云ふは。光國押戴。伊遺言の旨
逐一不うけたまはりぬ。心よ銘し骨に鏤く忘れず。某日不肖也
と云ふも。粉骨細身して微功をなす。伊勘氣のゆゑ。とらひ
靈魂に安んじとべ。のまごは。伊公を残りしあふまといひ。ちとと

光雅しとうれしげふ打笑われ。さるつら此世の名残り。生死長
夜のまがれ夢。醒すともかく。ありふけ。光國夫婦は嘆き記し
尺とてさるもの。わけて唐衣の両親にけれ。零々落し。さる
刃のさしほり。安堵のせひ。せりわづもあつ。又舅もつれし
みなれば。いふたれ悪と病世あつ。かすまで愁とさる。とぞ。世の
中よ我身むら。果報は。かたれた者。あはじと。かさぶと。雨山と
悲こさる。げふ理。とぞ。さる。さてあつ。えん。あつ。夫婦
泣く。葬の支度とす。野外に送り。一片の煙とまじ。七日の
仏堂にわんご。お營。さる。縁衣の袖を。あがり。あはし。しね。
夫のよて。あつ。又如月。良門。味方と集。人鳥。旅立。後。唯
ひとり。彼筑波の麓。なれ。菴室に住。其吉。左右と待。し。ま。た。が。



庵室あやむろ小室こむろの
 尼公あまのこうよはうの
 掲戸かたどとつまの
 荒猫あらいね九半下くわんげの

五
 口
 五



如月ごとつきのの
 皎俗せうぞくの
 髪かみ

三
 三

人目ばもつり擅越の履成のつとを忌む。おのづから布施物を得ると
 朝夕の糧尽くうららびぬ。ふ又將門の家臣。隅田九郎將真
 一子。同四郎真熊といふ者あり。父將真ハ將門滅亡の剣。打
 死し。真熊も其節いまで幼年ありしが。為人不及。上野國
 雷電山ふかれ住。獨戸となりて。しけれが力量とられ武藝も
 達し。ふれが。仲間の搦戸等おそれ。首長と敬ひ。荒猪丸と異
 名し。皆手下ふと属し。け。荒猪丸。勞せし。獸成たる仕
 方を案し。出。か。等。教へ。け。い。信伏し。野味を市
 小賣し。た。その價の半をうらら。荒猪丸が得分と。ゆ。今
 自獸と。辛勞なく。山と。人。交。將門。余
 類。事。心。安。年。月。お。ね。

志く。不。頃。日。如。月。比。丘。尼。良。門。と。心。と。合。せ。王。位。と。う。ぐ。ん。隱。謀。あり
 と。び。く。時。り。り。と。手。下。の。搦。戸。の。う。ら。野。令。衣。魔。九。郎。旋。風
 唾。六。栗。鼠。早。太。山。鷓。呀。助。とい。四。人。の。者。か。の。庵。室。よ。つ。け。お。て。
 朝夕の煮焼とせぬ。な。も。栗。鼠。早。太。早。走。の。達。人。なり。荒。猪。丸
 お。の。れ。も。折。し。庵。室。不。行。通。ひ。く。日。く。の。費。を。い。じ。め。よ。將。門。の。事。と
 ほ。う。あ。ひ。り。り。如。月。尼。ハ。荒。猪。丸。が。得。く。と。安。ん。じ。此。人。を。飯。俗
 髪。の。を。一。間。か。こ。ひ。し。れ。所。不。引。籠。て。髪。の。生。る。を。待。時。く
 荒。猪。丸。と。相。手。や。て。劍。術。及。調。練。或。ハ。兵。書。を。讀。く。軍。法。と。学
 我。神。功。后。皇。王。の。な。め。し。ふ。自。芥。鉞。と。り。天。下。を。さ。し。と。
 不。敵。あ。も。あ。り。ひ。り。り。か。く。佛。戒。を。破。り。庵。室。を。れ。ハ。仏。壇。の。鼠
 糞。を。ひ。り。ち。し。く。經。卷。を。け。じ。蜘蛛。糸。と。ひ。さ。む。と。ひ。佛。体。と

ほろく 経紙がやがりて壁がむごりへ。讀経の声ハ。霜夜の竈馬と
もみたるえ、香炉ととりて火桶とるせ。馥郁とれ香氣も。夏の夕
蚊かり火とららうりね。或ハ卒都婆を薪とみく。酒がわくね。或
と経机と魚盤とほしく。獣の肉をちめれば。不斷念佛の道場。忽屠
家の肉店と変へ。うてかりけれ形勢あり。まのこころん。深山小生
立ち。熊のごとく小鬚おひまぐ。狼のやうりれ眼ざの荒男ども。
とハ近くはくれば。恰も俊彦が娘のうつや小住ごころあり。如月尼
今ハ墨漆の衣をわたり。いろよき衣をちめし。顔がせのうつくさ
蟬娟とれ牡丹花の咲かたり。ごころあり。暁のうりやうみ。頭
ハ栗の毛毬のごとく生のびく。美女小似合ね頭の様。いこのこととて姿也
かゝる尾公大望成就祈禱の鳥。百日無言の難行とあり。立。毎夜且れ

時ハ水無野川にひりり。垢離ととり。袖小鏡をかり。手小鏡をり。銅
鈴が鳴りたり。明松の両方小火をとりて口より。高足駄とみく。く
。筑波山の險道をのほろ。明松の火風おちりて。劍鏡ふが中。銅鈴
の音ハ。うはみおとれく。よきよき。かの宇治の橋姫が。貴船小まら。比
形勢も。かやくとあり。又荒猪九が手下の。鴉戸等小傘して。
毎夜 人々人を殺さる。あま首と柵の枝小ひけり。紙手ととりかけて。
荒猪九が。相具し。その首と筑波明神の社頭。みそか。心
願を祈禱し。その首の髪小おり。狐つけく。冬ハ水無の川うぬ
みお沈めり。豈神明かれ。非道の糸と納受。なまらんや。おれを
つこや入る。尾公あひ。うけき。是皆内芝仙が。蝦蟇の妖術
物間ふけり。しゆと。あつとね。花の顔柳の腰。羅綺ふもたへ



吾
知
之
三
下



如
月
尼
百
日
無
言
の
行
と
修
一
毎
夜
丑
の
時
筑
波
山
の
や
明
神
の
れ

され手弱女ありあり。これ大膽強悪の志あること。漢土も
本朝も未聞不見の事なりかし。

下 綱 關

第十二條

爰ふ又、左衛門尉平惟時の源家の武威盛なり。權勢は
日來益々み居る。家士羽太九四郎といふ者ある。おりての意不
こころあり。いと生まつつらとて体ふる。密に一計をいひあ
仕おせま。おりの賞銀をさうとと命けり。これ何の計ぞかれ
ば大宅光雅が家。源家の宝器。陰の太刀といふ名劍あること
其惟時のひまひ。九四郎不棄らじめ。その劍を形代となす
源家を調伏とて。爲とのや。さうととふ九四郎浪人といつりて常陸
の國ふ来り光雅と同村。住軍学の指南成り。これふといとよせ

却て立り。ひとごとく巧言をりらひ。光雅父子不心をゆるさ
そりね。彼いさ。妻ありけり。生得好色の者あり。光國が妻唐衣の
美麗なり。姿をそく。慈慕の公頻お起す。太刀を奪んとおりのみ
唐衣をも盗出。古郷お連去。妻よせり。やとなくみけし。とも
光國が力量武藝とよけれ。容易お手を出さ。よ折もかな
うかひけれ。らふ。光雅父子よりけし。その虚ふお事。んけ
そやと。いそふ。むびけり。扱わ。歳々の時節より。百大雪あり
けれ。此日光國。亡父の七七日お當るを以。菩提所お通夜。ん事
お修行し。けれを。九四郎究竟の時とあり。夜半のころ。光國が家
高墾。んを越。二階よりおのびり。且手おひの矮狗を志め殺し
らの様子。をう。お唐衣。お夫の留主をより。い。睡ら



利太九四郎
雪夜大宅の
先園ヶ家小
よのひりり
おのひりり
宝剣をうけ
く外去

口

+



善知

+

下女へ庖厨ふ。居ねありし居るを幸ふ。先唐衣をとりてさへ
 葛籠のうちに押入る。背あひかみく案内を知れ事なれ何の苦
 もなくかの宝剣を盗る。事二つあり。盗人よくとあがりつ。追出けはバカと
 する時。下女祈りて醒し。盗人よくとあがりつ。追出けはバカと
 らりと抜く。唯一刀を斬倒し。花ごころを遊ばし。追人のからんや
 おそれ山越し。おちゆんと筑波山の間道みぞさしかつぬ。さき雪
 とさきとくはよくありみだれ。紛く揚くさき。柳絮を散らす如く。
 鵝毛を飛ぶさき。似たり。おくれ大雪の蓑笠してても着られ。真袖は打
 はひはけ。雪あふりを便ふさき。み行し。山あらしの吹雪はしくし。こ
 面おほく。と打るさき。寒氣骨を冷やあり。さき。足かき。りて
 いくふともさき。死かさる。日未よく。知る。道も。雪たつくは。りりて。一面

の玉地となり。東西をなほつとさ人なれば。公のやうにさる。さき。元
 角乃さき。さき。筑波明神の社。さき。たどりほき。階の上よの不
 了く。権息と休めり。柳此神の當山の峯ふあり。稲村権現男
 躰女躰両宮を祭る所あり。桓武天皇の朝。徳一上人當山を奠基
 一。其後万巻上人権現を勧請し。鎮主とす。これ當國の大社。母
 ち。莊嚴美麗を尽す。朱の玉垣。緑の甍。金柱。朱欄。干。楓格子。
 花狭間。細工と盡し。丹青。瓜いろどり。あきりも。さき。ばり。あき。桁梁
 の彫物。ハ。桐。鳳凰。雲麒麟。牡丹。獅子。王波。小屏。皆金玉とあり
 ぶめね。いく。羊。あり。古木の枝。社のめぐり。小立。さき。森。と。さき。の
 さき。常。小。天狗。の。さき。魔所。と。さき。宮。居。なり。さき。は。さき。と
 九四郎。ハ。此時。葛。筆。を。さき。唐衣。と。引出し。人抱。さき。ひ。け。れ。と。

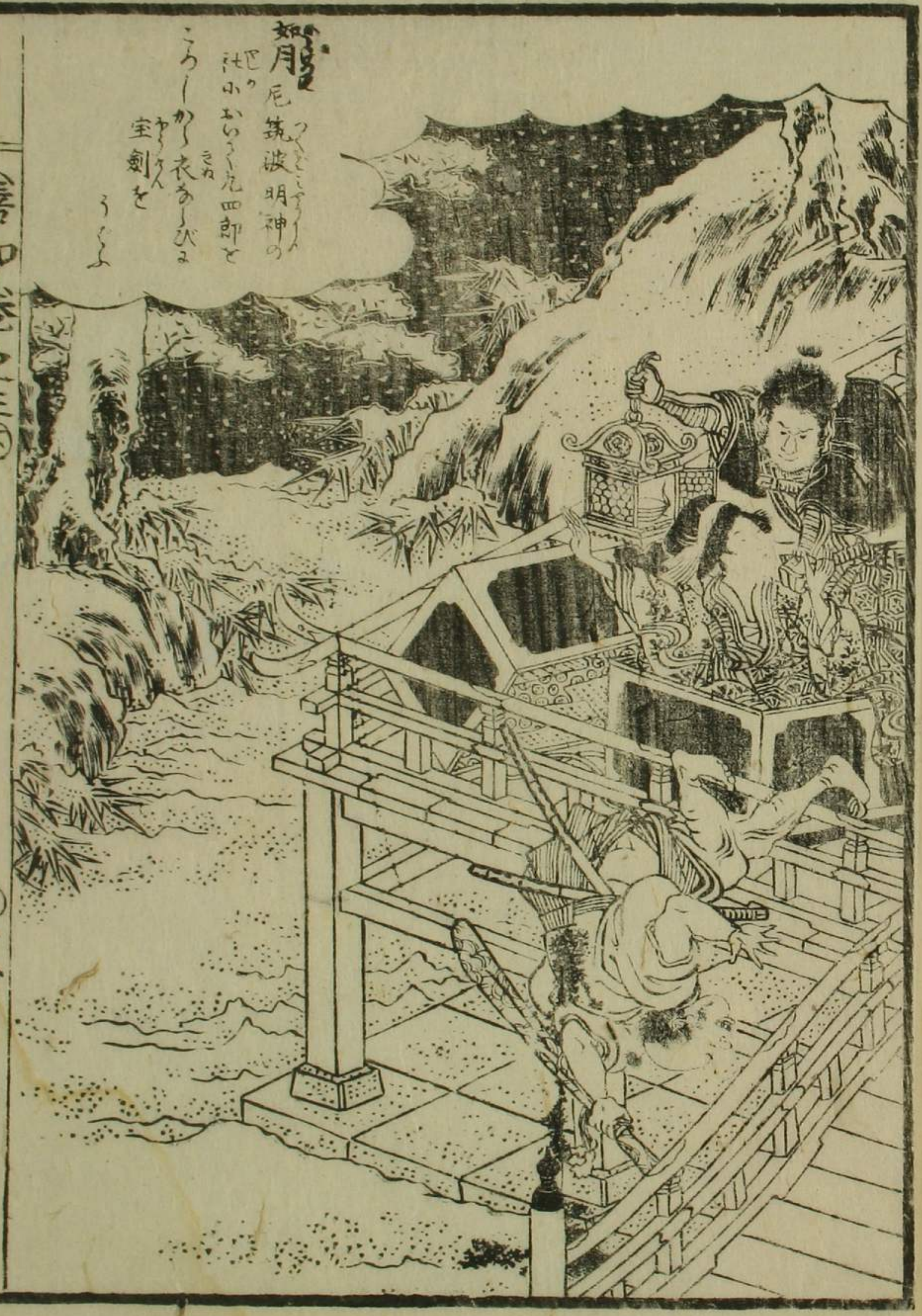
あれは。自憤をふのびく詞をすけ。汝さびく。貞烈をせり。たふ鉄
石の心ありとも。かくほぐ。我心底の誠を生け。ふ。まど。一點の情をふり。くれ。
負も不負も命ありての夏あるふ。我。一刀の下。小。黄泉の客とある。ふ。何のふ
も。の。龍の淵。虎の穴。ふ。ち。た。海。こ。もの。ぐ。る。る。は。し。我。お。ひ。込。る。
毒蛇のえ入。は。然。あり。と。き。か。の。ふ。か。た。く。と。り。も。唐。衣
と。耳。あ。も。入。れ。あ。ふ。の。し。ま。く。り。し。や。露。む。り。も。ら。け。ぐ。死。様。子。あ。
移。ば。九。四。郎。ハ。益。怒。す。ま。い。う。ふ。か。も。う。け。ひ。ま。や。然。る。う。ハ。せ。ん。と。は。
あ。さ。花。を。太。刀。風。よ。ら。も。さ。い。も。け。ま。は。ま。ど。是。非。お。お。か。ね。ん。悟。せ。ま
と。し。ひ。つ。緑。の。黒。髪。を。手。ふ。か。み。く。ら。う。か。ひ。の。提。氷。あ。と。劍。を。抜。く
胸。の。ふ。ひ。やく。と。押。あ。く。し。ご。く。か。く。も。ま。入。と。や。と。未。練。の。詞。り
唐。衣。あ。は。頭。を。打。れ。九。四。郎。ハ。れ。ま。ご。と。ち。の。ひ。き。り。胸。ぐ。ら。と。り。あ

欄干ふお。あて。刀。と。り。あ。け。て。吐。は。し。と。不。さ。ん。と。ま。れ。所。お。り。ひ。く。け。る
ら。ら。の。方。れ。唐。戸。の。ひ。ま。り。明。晃。く。た。れ。刀。の。尖。い。ま。毒。女。の。こ。く。閃。き
り。で。九。四。郎。が。背。中。よ。り。懐。き。ぐ。さ。と。ば。い。ま。や。一。急。ぐ。り。ま。ぐ。さ。ま。れ。た。
呀。と。な。ま。ら。の。声。と。こ。も。ふ。の。り。ま。は。ひ。ま。り。て。緑。より。下。お。ち。ら。り。
げ。あ。も。ら。ら。し。た。秋。勢。あり。此。折。も。雪。あ。づ。れ。の。音。い。ま。ま。は。し。く。ひ。た
り。り。社。も。震。動。一。峯。も。づ。れ。お。つ。の。と。う。か。あ。ご。り。あ。る。ふ。唐。戸。を。ら
と。ひ。く。え。く。顔。さ。し。じ。か。と。か。え。中。り。か。お。こ。と。笑。ひ。血。刀。を。提。く。
ま。ぐ。や。く。ふ。ま。く。と。ま。う。れ。ハ。別。人。ふ。あ。ん。是。乃。如。月。尼。あり。あ。と。ふ。つ。た。て
荒。猪。丸。立。出。尼。公。の。前。し。ひ。ご。ま。づ。け。如。月。尼。ハ。の。い。と。ご。目。成。り。つ。く
下。知。る。と。荒。猪。丸。の。意。と。と。あ。え。く。語。を。ら。り。九。四。郎。が。首。次。打
お。と。して。は。し。げ。せ。ば。如。月。尼。の。ひ。く。荒。猪。丸。お。か。せ。う。れ。将。門。の。雲。並。を。慰

一紙の祭文をとりいじりて。かの首の口中あはくほしめ。秋の葉よをさ
 神前ふそるへ。あがく祈念しをり。夢も夢えしごとく。忙然とて
 あられ居られ。唐衣をりよめごとく。葛籠のうらみれし。ていひけ
 百日無言の修行今夜満願あつた。かの大雲あく供物ふとぶ。首が得
 修をこげしを。赤く愁たふ。かの者もつとふ。ふりて首
 あめ。夏。大願成就のあはし。あつていひつ。かの錦の袋ふ入れ。宝剣と
 えつ。あがく袋を去。抜えらて。かとうふえ。残す。銅灯
 籠の火をひげ。うらうへし。え。扱も奇き。剣た。紋の星れ
 つ。あはれごとく。光の波のあはく。ふ似たり。水あ。蛟竜を断。陸あ
 犀革を斬る。傳々南越の巨關。西楚の太阿と。り名劍。我朝
 十柄のほだ。あ。と。こ。お。は。れ。ぶ。と。賞。歎。か。る。良。劍。い。

あ。く。あ。持。ま。さ。や。とい。かり。け。荒。猪。丸。袋。の。う。ら。より。あ。ら
 散。一。紙。の。状。を。え。つ。ひ。う。ひ。と。り。は。一。出。と。如。月。尼。これ。と。り。と
 一。り。讀。と。し。これ。大。宅。左。衛。門。光。雅。が。武。功。を。賞。と。り。此。劍。を
 あ。つ。と。い。感。状。あり。花。押。を。つ。多。田。の。満。仲。が。状。不。疑。る。劍。の
 則。源。家。の。秘。藏。陰。の。太。刀。と。い。名。劍。あり。劍。相。の。秀。と。れ。も。う。あ。か
 ざ。や。今。あ。た。め。い。ふ。も。夏。あ。と。し。け。と。我。十。善。の。皇。統。を。と。る。掛
 自。斧。鉞。を。執。り。万。國。を。征。討。し。當。今。の。位。を。う。が。ひ。女。帝。と。あ。を。ん
 牙。良。門。を。閉。白。と。あ。と。亡。父。の。志。派。と。こ。え。ん。と。お。り。ひ。う。つ。時。節。ふ。と。り
 ぞ。夫。の。陰。れ。太。刀。の。手。あ。り。し。を。我。願。望。を。神。明。の。納。受。し。た。ま。ふ
 荒。猪。丸。い。う。ふ。も。こ。こ。を。い。は。れ。と。て。あ。り。あ。く。さ。び。ね。か。く。如。月。尼。か。の

一紙の祭文をとりいじりて。かの首の口中あはくほしめ。秋の葉よをさ。



如月
尾筑波明神の
社小おいら九四郎と
ころーか衣あぶ
宝剣を

善知卷之三十四

十五



善知卷之三十四

より穂先をそらんぐつとほねふへさかひり。荒猪丸少一もひらきと刀
 を抜く水車のめくらごとくくうりやうけい。其音颯々として吹て風の
 梢をふくまふごとく。劍の光は晃々として雪小映ふ。皎月のおとく
 あり。白張着しれ宮奴ども。乱れしれ形勢ハ。鷺の群飛ごとくあて近江
 鷺を見かじしといふ。雪の匂をひひ合ふもむりあり。荒猪丸飛ぶの如く
 ぐつぐつに雪を踏立火花をらしして戦。或ハ右袈裟。左袈裟。あつひを
 梨割車斬片腕ごとくしれ。伏もあり。足らびおらるる倒すもあり。暫時
 のうら小一人も残らざと打込けし死につみく岡のごとく。血ハ流しとて泉の
 ごく。白雪くらしらるるあふ変じく。氷の地獄ハ血の池を俄小堀如く
 あり。如月尼ハさたむとらう。社のうら小を避く。あふいたがくたの始
 終を入居らん。ちるが。此時階をくぐりてい。汝ハ武藝拔群あり。ごごご

ハ父君の羽翼しれ。隅田九郎將真ガ嫡子あり。戦場のそとくたも。そひ
 ちりれたたのもも。我輩の素姓を察した。奴原なれば。一人も生て
 おして。後日のそらまげあり。常言も。人を殺さば血をふよ。そらひ
 あ。よりく。とめをうせよといふあぞ。あふ猪丸げふも。とりとあそひ
 のうり伏され十四五人の者ども。狐引もとり。いらく首をとりてけ。
 如月尼。さうびいひけら。おひくごあやぐの人を殺しれ。當國の
 住居。かまふく。我がま。別ふ。たかれ家なり。あおら。夜の明
 ざれららふ。菴中の雜具をとり。あそめ。か。とあち。行さ。その
 女ハ當國の浪人。大宅太郎光國ガ妻ふ。かひは。我いま。光國を
 え。あ。ご。と。く。曾く文武の達人あること。狐や及びね。その女
 人質。と。味方。あ。ぬ。一方のた。ひ。な。が。葛。筆。け



善知卷之三



せんとして先亡父の墓ふりていしむん。たゞらふ水無の川の下
 渡りけり。川上より一つあましりし首流まき岸ふつとて
 偶えつけいぶり。やうとりあひくえふ。九四郎が首ふま
 せられ。何ふあふん。口中ふまきく。おれあれば。小柄を
 よくえられ。何ふあふん。口中ふまきく。おれあれば。小柄を
 をひら。うちあふりのをひきいし。一通の書あり。濡らりて
 爛れを。公あぐあつひ。ひら見よ。人の霊を参る文なり。
 讀おりの。おひけり。此文中小新皇帝の霊を参るといふ五字あり
 とえれば。正是將門と参る文。人。さて。此者將門が所縁の者。殺
 且下ぐ。さされ。毒も。劍も。將門が餘類の手ふおらたふ疑なし。
 此一通の後日の證據と。さ。さ。のあり。て。懐ふ。か。の。首
 ひく。い。ひ。け。れ。ぬ。汝が悪業。うち。うち。報。あり。さ。さ。此。さ。ふ

ありぬ。我恨の拳。おひ。さ。さ。と。手。さ。の。石。を。り。頭。徴。塵
 不。打。碎。く。水。中。お。踢。お。う。あ。ま。さ。ら。よ。れ。か。の。將。門。の。餘。類。も。
 よも。當。國。あ。ん。と。べ。ん。先。近。國。を。た。づ。ね。と。お。ひ。て。さ。さ。り
 旅。路。ふ。お。り。し。と。け。り。

○ おりの石。さ。さ。つ。け。水。毎。の。川。お。あ。づ。め。た。さ。お。り。の。石。お。ら。う。
 川。下。お。流。つ。さ。れ。あ。め。人。も。あ。づ。さ。光。國。が。目。お。り。け。り。
 天。光。國。が。孝。義。を。感。じ。あ。ひ。く。妻。あ。づ。び。小。劍。を。た。づ。ね。便。を。得
 せ。且。如。月。尼。の。惡。意。を。あ。み。く。滅。亡。の。一。端。と。な。り。あ。あ。唯
 是。お。る。と。天。の。眞。罰。あり。光。國。妻。お。再。會。の。更。如。月。尼。滅。亡
 の。子。細。を。あ。ん。と。要。せ。第。十。八。回。第。十。九。回。を。讀。得。て。あ。べ。し。

○唐衣くわんぎ。九四郎くわんしやうが為なふ。わどくわどく一命いちめいを失うしなはんとあつれども。つひつひ不ふ探たん致し破やぶらんと。死しともとも牙こゝろを潔いさぎよくせんとも。げふ人ひとの妻つまも者もののありたれともぞわ。

○九四郎くわんしやう非道ひどうを行おこなふ。報むくひ目前まへふいりて。如月ごとげつ尺ふちの為なふ害がいせらる。如月ごとげつ尺ふちも又またのらふ光國こうこくが為なふその牙こゝろを亡なす。螻蛄ろうこ蟬せみを捕とらふ。黄わう鵲じやく後ごふ在あることぞ知しと。世人せいじん此理このことを顧かへとんがあふんうらむこと。

善知傳卷之三下冊終

